

文書料紙調査の観点と方法

本 多 俊 彦

はじめに

日本古文書学における文書料紙研究は、古代・中世文書に関する研究を中心に展開してきた。その流れについては、近年発表された富田正弘「古文書料紙研究の歴史と成果—檀紙・奉書紙と料紙分類—」に詳しい¹。富田によると、戦前の黒板勝美が文書料紙の研究方法として、①文献による考察と②文書原本の実例調査による考察を提起して以降、前者の研究は伊木寿一や小野晃嗣、寿岳文章らによって徐々に進められた。一方、なかなか進展することのなかった後者については、田中稔と上島有の研究を得て大きな前進を見せたという。

田中は「紙・布帛・竹木」において、文書料紙をその原料や歴史的名称、抄紙方法によって捉えるという視角を提示した²。一方、上島は東寺百合文書の整理に携わった経験などをもとに、日本中世における独自の文書料紙体系を発表する³。上島の示した中世文書料紙体系は古文書料紙原本を直接調査・観察し、そこから導き出された画期的なものであったが、一方でこの中世文書料紙分類法は分類紙種名に奉書や美濃紙といった近世文書料紙の名称を含むという矛盾も孕んだものであった。また、この料紙分類が中世全時期を通じたものであるか、または特定の時期を捕捉したものであるかといった問題などが指摘されるようになり、こういった点を克服するための研究が必要となる⁴。

このような状況の中で、文化財修復学の増田勝彦や製紙科学の大川昭典らによる前近代抄紙技術の解明に向けた共同研究⁵に刺激を受けた湯山賢一は、文書料紙をその原材料と前近代以前の抄紙技術の歴史から説明すべく、富田正弘らと研究方法を模索し、顕微鏡を用いた文書原本の観察や文書料紙復元実験に取り組んだ⁶。これらは近現代の製紙技術研究において既に行われていた研究手法であったが、これらを古文書料紙研究へ援用することで⁷、文書料紙研究に新たな非破壊調査方法論が誕生したのである⁸。古文書料紙の調査方法として、料紙の重量や密度、簀目の太さ、糸目幅、板目、刷毛目、紗目などの観察・計測・計算、繊維・非繊維物質・填料の顕微鏡観察を行い、その調査結果から原材料と抄紙方法を推測していくというこの研究手法は、その後の文書料紙研究を大きく進展させた。これは、それまでの一部の碩学による主観的な料紙分析・判定から、可能な限り客観性を担保すべくデータ化に努めたものであり、小島浩之の言を借りれば、「古文書料紙の非破壊調査の方法論として、現在における一つの到達点」ということになる⁹。

湯山・富田らを中心としたこの文書料紙調査・研究の手法は、富田正弘や山本隆志らが研究代表を務めた科学研究費補助金による共同研究に参加した研究者らに影響を与え¹⁰、現在、日本史研究の分野において古代・中世史から近世史へと広がりを見せるだけでなく、日本の東アジア史研究者や韓国・中国の研究者らとの共同研究でも用いられつつある¹¹。筆者自身もこのような広がりの中に身を置くものであって、日本近世文書の料紙研究を進めつつある¹²。また、本報告書の執筆

1 総論：料紙および料紙調査方法の諸問題

者の多くも、このような流れを汲んでいる。本稿では、本研究でも用いられた、湯山・富田を中心とする文書料紙研究グループにおいて実践されている文書料紙調査方法とその研究成果の紹介、及びこれらを東アジアの古文書料紙調査に及ぼそうとする際に留意すべき点などについて私見を述べてみたい。

1 文書料紙調査の観点

文書料紙調査で用いる調査票として湯山・富田らの研究グループで最初に考案されたのは、科学研究費補助金（総合研究 A）「古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究」（研究期間：平成 4 年度～平成 6 年度、課題番号：04301039、研究代表者：富田正弘）の研究成果報告書にも掲載された、以下の調査票であった【図 1】。

所 見		厚 さ		精 粗	漉 上 り	織 紙	紙	面	外 見	材 質	欠 損	部 分	形 状	様 式	充 所	端 裏	日 付	所 蔵 者	
産 地 ()	天	袖	精 粗 漉 上 り 織 紙 紙 面 外 見 材 質 欠 損 部 分 形 状 様 式 充 所 端 裏 日 付 所 蔵 者	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り	漉 上 り
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
	①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱

料紙データ

文書データ

199 年 月 日 調査 担当者 () 刊本 ()
文 書 料 紙 調 査 票

図 1 文書料紙調査票（平成 4 年版）

この調査票の詳しい解説については、同研究成果報告書をご覧くださいこととして、ここでは文書料紙調査の観点を理解するため、調査項目に触れておきたい¹³。

この調査票の構成は、文書データと料紙データとに大別できる。文書データとしては、所蔵者、史料群名・史料番号、文書の日付、文書名、端裏書、充名書、差出書、様式（下文様・書札様・その他）、形状（堅紙・折紙・切紙・続紙）、封式（切懸封・捻封・折封・その他）、封紐の有無と長さ、調査対象部分、調査対象位置を項目に設定していた。これは、文書様式や種類、料紙の生産年代、差出

人と宛名人の身分関係などと文書料紙との相関関係の検出を企図していたためである。

一方、料紙データとしては、1 寸あたりの簀目の本数・糸目幅（簀を編んだ糸の間隔）・厚さ・法量（縦横寸法）・重さなどを機器で計測した客観的データを採取する。これに加え、材質（楮・雁皮）・漉き返しの有無・染色の有無・打紙・外見（大きさ・厚さ・堅さ・品質）・紙面の状態（地色・光沢・漉皺）・墨の状態（種類・乗り・滲み）・繊維の外見（太さ・長さ・密度）・漉上げの痕跡（簀目・糸目・刷毛目・紗目など）・漉上げの精粗（漉斑・繊維溜・異物混入）・破損状況という調査者の主観的データも設定している。ここには、文書料紙を多面的かつ徹底的に観察しようとする姿勢が看取される。

その後、文書料紙調査・研究を進めるなかで調査項目の見直しなどが行われ、科学研究費補助金基盤研究（A）「東国地域及び東アジア諸国における前近代文書等の形態・料紙に関する基礎的研究」（研究期間：平成20年度～平成23年度、課題番号：20242016、研究代表者：山本隆志）で作成されたのが、以下の調査票である【図2】。

[illegible]

図2 文書料紙調査票（平成20年版）

筆者らが現在、文書料紙調査に使用しているのはこの調査票であるが、以前の調査票から文書データの端裏書や様式（下文様・書札様・その他）が外れる一方、形状や折様、封式、料紙皺等を図示する欄が加えられている。料紙データの改訂・追加部分に注目すると、皺付（皺について、簀目・剥皺・干皺・漉皺を判断）・非繊維物質・填料（米粉・白土の有無・量など）が調査項目に新しく加えられた。さらに、材質の部分に楮紙を追加し、紙種についても楮紙系を檀紙・引合・杉原紙・強杉原・

1 総論：料紙および料紙調査方法の諸問題

大高檀紙・奉書紙・美濃紙・雑紙、斐紙系を鳥子・雁皮紙・厚様・薄様・間似合・楮交斐紙とするなどの改訂が行われている（下線を施した部分は新しく追加された紙種名）。以上のことは、湯山・富田らを中心とした研究グループが、歴史記録上に見える紙の名称と現存する文書料紙との関係を合理的に説明することを企図して¹⁴、可能な限り客観的な判定基準の構築を目指した軌跡を示している。

このような湯山・富田らの調査方法は、小島によれば、「目で見える、触るなど、調査者の感覚機能により観察」（＝外形・表面観察）を行い、「法量、重量、厚みなど料紙の物理量を測った」（＝形状測定）のち、「顕微鏡やカメラなどの各種光学機器を利用した観察・測定」（＝光学観察・測定）し、調査者からの主観的データと物理量や光学観察・測定による客観的データを相互に突き合わせて定量的に分析する手法とまとめられる。そして、これによって、文書料紙の調査・分析が碩学による職人的技術から、学術的色彩を帯びた調査方法論と言えるようになったとする小島の指摘は至言といえよう¹⁵。

2 文書料紙調査に使用する機器

現在の文書料紙研究では、前述のような湯山・富田らの研究グループによる文書料紙調査方法を基本にしながら、その主観的データの部分に客観性を担保できるような形の模索がなされている。例えば、文書料紙の繊維観察においては、反射光（文書の表面に照射した光）や透過光（文書の下から照射した光）による顕微鏡観察によりデータを採取することになるが、これまでの調査ではその繊維判断の根拠となった顕微鏡画像を撮影・記録するようなことはなく、調査者の主観に基づいて判断・記録された情報を記録するのみであった。そこで、筆者が研究代表者となった科学研究費補助金基盤研究（B）「近世文書料紙の形態・紙質に関する系譜論的研究」（研究期間：平成25年度～平成28年度、課題番号：25284129）による共同研究などでは現在、文書料紙調査にこのような顕微鏡画像の撮影・記録を作業として加え、データの蓄積を進めている。このような営みは、「客観的な指標を示し追試による検証が可能な方法を具現化」していくために不可欠な作業といえよう¹⁶。

小島は調査手法を①外形・表面観察、②形状測定、③光学観察・測定の3手法に分類したが¹⁷、これに基づいて筆者たちの行なっている文書料紙調査の使用機器を記せば、次のようになる。

①外形・表面観察

文書料紙の繊維判定や品質、漉上げ工程に関わる情報を得るための簀目・紗目・糸目の観察には、透過光としてライトパネル（ムトーエンジニアリング：SLT-A4C）を使用している（なお、ライトパネルについては、現在、より小型で軽量の有機ELパネルへの移行を試行中である）。また、料紙の乾燥工程に関わる情報を示す板目・刷毛目の観察では、必要に応じて、白色LED斜光ライト（高槻電器工業株式会社：SLW54Z1-S3）を用いている。

②形状測定

厚さの測定にはシックネスゲージ（ミットヨ：547-301）を使用し、料紙の天・地・袖・奥のデータを3点ずつ採取して平均する。また、重さの測定には、重量計（イシダ：CBII-600）を使用している。この厚さと重さのデータに法量（縦横寸法）データを採取することで、紙の坪量（容積 $[g/m^3]$ ）や密度 (g/m^3) を求めることができ、料紙の特定が可能となる¹⁸。

③光学観察・測定

文書料紙の繊維判別や填料・非繊維物質の有無を確認する際には、透過光にライトパネルを使用し、顕微鏡（杉藤：TS-8LEN-100WT、ただし、接眼・対物レンズを被写界深度の高いものに交換）で観察する¹⁹。また、この顕微鏡画像を顕微鏡用デジタルカメラ（レイマー：WRAYCAM NF500）にて撮影する。このほか、文書表面の画像撮影には、デジタルマイクロスコープ（スカラ：DG-3X）を使用している。

なお、デジタル機器を利用した文書料紙調査の手法については、高島晶彦「デジタル機器を利用した古文書料紙の分析」に詳しい²⁰。ここで高島は、デジタルマイクロスコープを用いた文書料紙の繊維配向分析や透過光による顕微鏡観察、光沢度計・分光色差計を用いた光沢度・色の測定と分析を紹介しているが、特に力説しているのは繊維配向分析による料紙の表裏判定であろう。このことは、中世古文書学における裏紙・礼紙に関する議論に新たな視点をもたらした²¹。このように、文書料紙データを蓄積していくことで、これまでの研究に大きな進展をもたらすことも可能となる。次に、文書料紙データからどのようなことが読み取れるのかについて、若干紹介してみたい。

3 文書料紙調査からわかること

富田は「身分制社会における権威主義的政治の下では、為政者は権威誇示のためにその発給文書に相応の品質の料紙を用い、発給者の上位から下位まで身分格差に応じたその品質の格差を定めようとする」と述べているが²²、そうであるならば、文書料紙の選択や変遷を丹念に追うことから、為政者の権力の変遷や組織整備の過程が見えてくることもあるはずである。筆者は以前、福井藩が発給する知行宛行状の整備過程を検討した²³。そこでは、福井藩士の間に家格差が生じてくるなかで、藩主名で発給される知行宛行状に使用する料紙にもその家格差が反映されるようになることや、藩の石高が半分となってしまう「貞享の半知」以降は藩主名で出される知行宛行状が発給されなくなり、代わりに従来から暫定的に発給されていた勘定所の奉行名で出された「御書出」が知行宛行状の代替機能を果たすことを明らかにした。そして、当初は暫定的なものであった「御書出」が公式性を帯びていくなかで、料紙も法量が大きくなるとともに、填料としての米粉の混入量が多くなり、良質化していく。このようなことは、文書料紙の検討から権力や組織の変遷を検出できることを示す好例といえよう。

また、湯山は「料紙遺品と歴史的名称上の比較検討は料紙研究の基本でなければならない」と説き、そのキーポイントとなるものに①料紙の材料の分析、②材料を紙漉きのための紙料にする工程の問題、③漉き上げの際の用具と技法の問題を挙げている。そして、これらを念頭におき、「伝来した料紙遺品を対象に検討し、歴史的名称上にみえるものが遺品のどれに相当するのか、という地道な作業」を行うべきとする²⁴。筆者もそのように考え、加賀藩知行宛行状を検討した際、記録史料から紙種名がわかるものとの突き合わせを行ったことがあるが²⁵、その過程で加賀藩の奉書紙には填料としての米粉が入れられなかった可能性を指摘した。このことは、奉書紙には大量の米粉が混入されるという従来の理解に再検討を迫るものであり、日本近世においては同じ紙種名を使っていても素材が異なる紙である場合がありうるということになってしまう。これが地域

1 総論：料紙および料紙調査方法の諸問題

的特性に由来する特殊な事例なのか、それとも他地域にも看取される事例となるかは今後の調査で明らかにしていかなければならない。

このほか、料紙データを利用した研究として、密度の問題を挙げておこう。これも筆者の研究であるが、仙台藩知行宛行状を検討した際、その文書料紙が薄手の斐紙を複数枚貼り合わせたものであることを指摘した²⁶。そこで、この雁皮の複層紙について、その抄紙工程を検討するために文書料紙復元実験を行ったことがあるが²⁷、その際、原文書は雁皮紙としての平均的な密度を示したのに対して、復元紙はかなり低めの密度を示した。つまり、復元紙には原文書の抄紙過程とどこかに違いを生じてしまい、その結果、低めの密度となってしまったことを示唆している。このように、密度のデータは文書料紙の特質を知る上で重要な役割を果たすのである。

おわりに

以上、本稿では日本古文書学における文書料紙調査の方法について紹介してきたが、最後に東アジアの古文書料紙調査における留意点について若干の私見を述べることで、なんとか執筆の責を塞げればと思う。

筆者は琉球王国の辞令書や朝鮮王朝の文書料紙調査にも少し参加したことがあるが、これらの事例では日本の文書料紙調査で用いているような機器以外の必要性を感じることは別段なかった。しかし、本共同研究における中国の勅諭・誥命・告身、ベトナムの神勅などの文書料紙調査に参加するなかで感じたのは、中国の文書料紙の多様さである。紙料となる植物繊維の多様さもさることながら、織物が文書料紙となることをも想定した調査方法・器具の選定をしなければならぬことに驚きを覚えた。織物の観察では、我々の使用しているような顕微鏡は全く役に立たない。幸い、デジタルマイクロスコープで観察及び画像撮影ができたため、大きな問題には至らなかったが、素材の情報を事前に入手し、調査器具などを備えることが必要であると痛感した。また、ベトナムの神勅を調査した際には、文書料紙に多くの装飾や加工が施されており、これらに用いられている物質を特定するための蛍光 X 線分析が必要となり²⁸、同じく当初は想定していなかった機器の力が必要になった。

東アジアの文書料紙調査を行う場合、そもそも日本国内に現存する中国文書の多くは、皇帝発給などであるために国宝や重要文化財に指定されており、文書原本の調査が困難となっている場合も多いと想像される。仮に調査できた場合でも、貴重であるが故に裏打ちなどの加工がなされているため、料紙データが十分に採取できないこともある。さらに、対象文書の絶対数が少ないため、日本の文書料紙研究のように、たくさんのデータを収集して統計的に処理していくことも望みにくい。そういった限られたなかでの調査・研究となることを覚悟して臨まなければならないようである。

【謝辞】本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「近世文書料紙の形態・紙質に関する系譜論的研究」（研究期間：平成 25 年度～平成 28 年度、課題番号：25284129）の成果の一部である。

- ¹ 富田正弘「古文書料紙研究の歴史と成果—檀紙・奉書紙と料紙分類—」（『東北中世史研究会会報』第20号、2011年）。以下、文書料紙に関する研究史については、もっぱらこの論考による。
- ² 田中稔「紙・布帛・竹木」『日本古文書学講座』第1巻 総論編、雄山閣出版（1978年）
- ³ 上島有「中世の檀紙と御判御教書」『日本歴史』第363号（1978年）や上島有「中世文書の料紙の種類」小川信編『中世古文書の世界』吉川弘文館（1991年）など。
- ⁴ 富田正弘「紙素材文化財の料紙判定法について」『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代測定に関する基礎的研究』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書、研究代表者：富田正弘）（2008年）
- ⁵ 増田勝彦編『和紙の研究—歴史・製法・用具・文化財修復—』（財団法人ポーラ美術振興財団助成事業「文化財修復用紙としての土佐典具帖紙等の特性調査研究」研究報告書）（2003年）など。
- ⁶ 湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版（2017年）の「あとがき」参照。
- ⁷ 前掲註5 富田論文
- ⁸ このほか、文書料紙調査方法については、園田直子「素材としての和紙に関する基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集（1994年）、宋倉佐敏編『必携古典籍・古文書料紙事典』八木書店（2011年）や保立道久・高島晶彦・江前敏晴・韓允熙・杉山巖・山口悟史・松尾美幸・谷昭佳・高山さやか「編纂と文化財科学—大徳寺文書を中心に—」『東京大学史料編纂所研究紀要』第23号（2013年）などの研究もある。なお、最近発表された高島晶彦「『講義録』中世古文書料紙の研究と保存について」『興風』29号（2017年）には文書料紙の繊維の判別方法や填料、抄紙技術などが詳しく述べられており、調査使用機器の写真も収められている。
- ⁹ 天野真志・富善一敏・小島浩之「近世商家文書の料紙分析試論：武蔵国江戸日本橋白木屋大村家文書を例として」『東京大学経済学部資料室年報』第7号（2017年）
- ¹⁰ 科学研究費補助金（総合研究A）「古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究」（研究期間：平成4年度～平成6年度、課題番号：04301039、研究代表者：富田正弘）、科学研究費補助金基盤研究（A）「紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代測定に関する基礎的研究」（研究期間：平成15年度～平成17年度・平成18年度～平成19年度、課題番号：15200058・18200054、研究代表者：富田正弘）、科学研究費補助金基盤研究（A）「東国地域及び東アジア諸国における前近代文書等の形態・料紙に関する基礎的研究」（研究期間：平成20年度～平成23年度、課題番号：20242016、研究代表者：山本隆志）など。
- ¹¹ 中国古文書料紙研究の現状と課題については、小島浩之「中国古文書料紙研究への視角」湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版（2017年）がある。
- ¹² 例えば、筆者が研究代表を務めた共同研究としては、科学研究費補助金基盤研究（B）「近世文書料紙の形態・紙質に関する系譜論的研究」（研究期間：平成25年度～平成28年度、課題番号：25284129）や東京大学史料編纂所「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」一般共同研究「織豊期の文書料紙の形態・紙質について—前田家関係史料を中心に—」（研究期間：平成27年度～平成28年度）、公益財団法人サントリー文化財団：人文科学、社会科学に関する学際的グループ研究助成「和紙技術・文化論の再構築をめざして：多言語による記録と伝世資料の比較検討による学際的研究」（研究期間：平成29年度）がある。
- ¹³ 以下、この調査票については、科学研究費補助金（総合研究A）「古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究」（研究期間：平成4年度～平成6年度、課題番号：04301039、研究代表者：富田正弘）研究成果報告書（1995年）及び前掲註5 富田論文に拠る。
- ¹⁴ 湯山賢一「料紙論と和紙文化」同氏著『古文書の研究—料紙論・筆跡論』青史出版（2017年）（『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代測定に関する基礎的研究』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金[基盤研究(A)]研究成果報告書[2008年3月]を補訂した論考）
- ¹⁵ 前掲註10 論文
- ¹⁶ 林譲「小特集『中世・近世文書料紙研究の現状について』まえがき」『古文書研究』第80号（2015年）
- ¹⁷ 前掲註10 論文
- ¹⁸ 湯山賢一「博物館資料としての古文書」同氏著『古文書の研究—料紙論・筆跡論』青史出版（2017年）（初出：『新訂 博物館資料論』（放送大学教材）、2008年）
- ¹⁹ 文書料紙の繊維判定や填料の観察の方法については、大川昭典「楮・三桠・雁皮繊維の鑑別」・同「文書料紙の填料の観察」『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代測定に関する基礎的研究』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書、研究代表者：富田正弘、2008年）に詳しい。
- ²⁰ 高島晶彦「デジタル機器を利用した古文書料紙の分析」『古文書研究』第80号（2015年）
- ²¹ 韓允熙・江前敏晴・高島晶彦・保立道久・磯貝明「中世大徳寺文書に見る和紙の表裏と書状の習慣」『日本史研究』第579号（2010年）
- ²² 前掲註5 富田論文
- ²³ 本多俊彦「福井藩の知行宛行状について」『古文書研究』第80号（2015年）
- ²⁴ 湯山賢一「我が国に於ける料紙の歴史について—『料紙の変遷表』覚書—」同氏著『古文書の研究—料紙論・筆跡論』青史出版（2017年）（のち、湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版[2017年]に掲載）
- ²⁵ 本多俊彦「前田利常後見期の加賀藩知行宛行状について」湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版（2017年）
- ²⁶ 本多俊彦「仙台藩知行宛行状について」『東京大学経済学部資料室年報』第3号（2013年）
- ²⁷ 小島浩之・森脇優紀・本多俊彦「研究ノート：近世雁皮『複層紙』の復元実験研究」『東京大学経済学部資料室

1 総論：料紙および料紙調査方法の諸問題

年報』第6号（2016年）

- ²⁸ 矢野正隆「ベトナムの神勅：九州国立博物館所蔵資料の概要と基礎データ」『東京大学経済学部資料室年報』第6号（2016年）